第4節 子どもの進学に対する期待

東京以外の都市では、約５割以上の一定層が自分の子どもに「大学院卒業まで」希望しているのに対して、東京のそれは2.2%と大きな差異がある。

前節では、数や文字、外国語、芸術的な才能を伸ばすことに力を入れているかどうかについて、東京は比較的低いスコアである一方で、それ以外の都市では高いことを確認した。それでは、子どもの進学に対する期待はどうであろうか（**図２−４−１**）。

子どもの性別によって差異が大きい東京

第一に、東京は「大学卒業まで」と回答する比率が最も高いとともに、その性差も大きい。全体では「大学卒業まで」は66.2%であるが、男子は79.0%（「短大卒業まで」0.2%）、女子は53.4%（「短大卒業まで」21.1%）と、男女間の格差が約26ポイント存在している。

以下でみるように東京以外の都市は、多くが「大学院卒業まで」と回答しているが、東京では「大学院卒業まで」は2.2%（男子3.1%、女子1.4%）である。

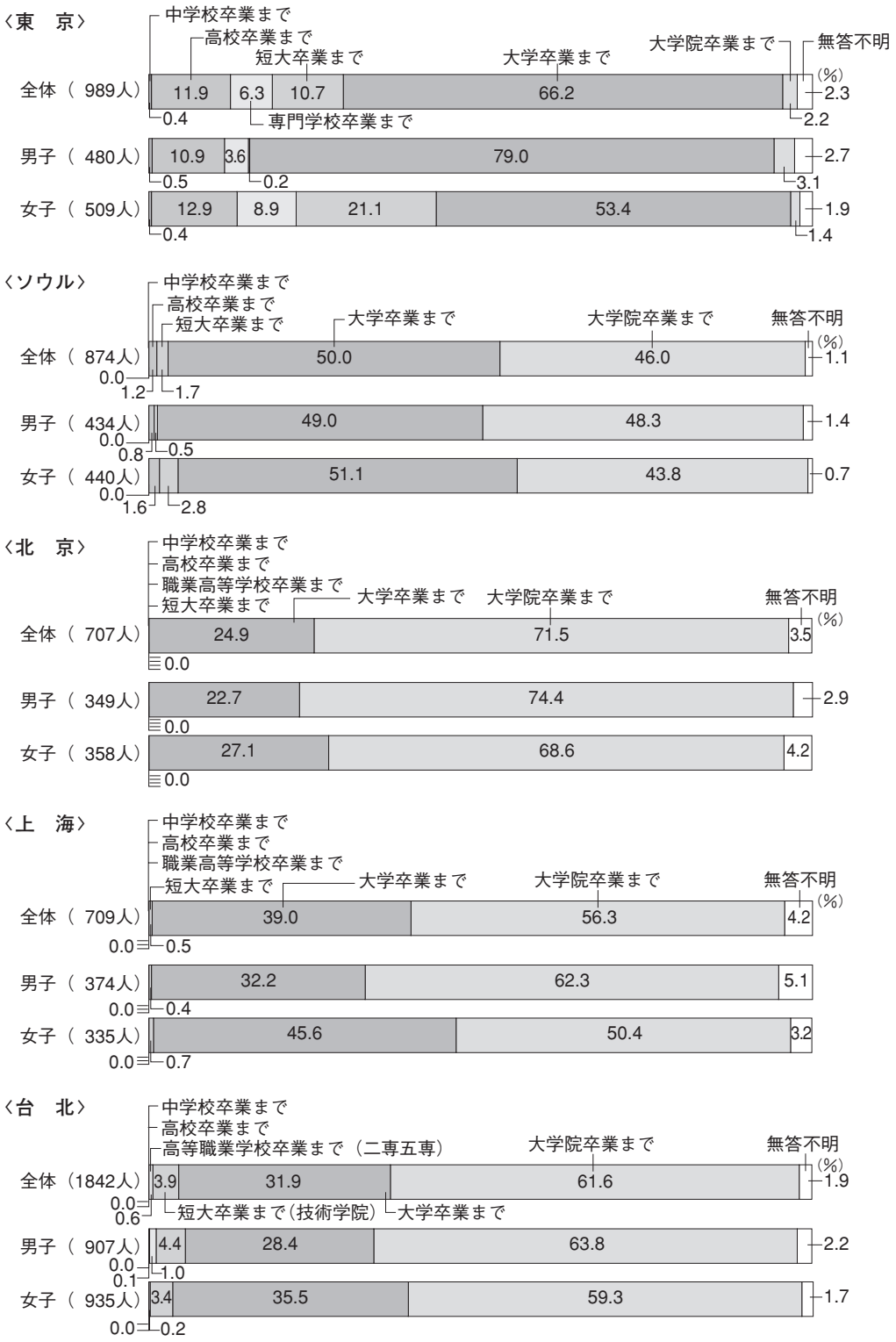
「大学卒業まで」と「大学院卒業まで」が半々のソウル

第二に、ソウルは、数値的にはちょうど東京と北京の中間に位置づけられ、「大学卒業まで」（50.0%）と「大学院卒業まで」（46.0%）が半々となっている。これにはいくつかの解釈が考えられるが、学歴以外の価値の多元化が進行している日本と、その対極にある中国との間にソウルが位置づけられることに加えて、大学卒業後の就職難という韓国独自の労働市場の問題が関係していると思われる。

「大学卒業まで」よりも「大学院卒業まで」が多い北京、上海、台北

第三に、北京、上海、台北では、「大学卒業まで」よりも「大学院卒業まで」が上回っている点が特徴的である。最も高いのは北京であり、男子が74.4%、女子が68.6%となっている。次いで台北であり、性差はあまり大きくなく、男子63.8%、女子59.3%である。一方で上海は性差が大きく、男子は62.3%、女子は50.4%であり、男子よりも約12ポイント低くなっている。

■図２－４－１　子どもの進学に対する期待（全体　子どもの性別）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）ソウルは「専門学校卒業まで」に相当する項目をたずねていない。